

雑誌『家事と衛生』と大正・昭和前期の大阪

目的：大正・昭和前期の時代背景の中で、雑誌『家事と衛生』の住居に関する論文を検討し、社会の動きと家庭生活に関する研究の関連を考察する。

方法：雑誌『家事と衛生』の掲載論文、や雑誌『大大阪』大正・昭和前期の『大阪朝日新聞』などに掲載された論文・記事などの分析をおこなう。

成果：雑誌『家事と衛生』は、大阪市立衛生試験所の中に設立された家事衛生研究会を母体に、1925年（大正14）7月に創刊された。当時大阪は、日本最大の工業都市であり、第一次世界大戦後の工業発展に伴い、急速に都市問題を顕在化させていた。特に乳児死亡率は全国一の高さを示しており、密集過住の非衛生的な生活がその原因と考えられていた。市民の過密生活の改善即ち環境の改良、住宅問題が、当時の大阪の緊急課題だったのである。大阪市立衛生試験所は、衛生上からこの問題を解決すべく調査をおこない、都市改善計画に寄与した。雑誌『家事と衛生』では、これらの社会情勢に応える形で、創刊当初4年間にわたって住宅衛生の項を設け、論文を掲載していった。一方、雑誌『大大阪』は、大阪市政の諸問題についての調査・研究をおこなう大阪都市協会の機関誌であった。このなかでも住宅問題、環境問題は大きなテーマであり、大阪市立衛生試験所の調査報告を掲載していったのである。このように、雑誌『家事と衛生』で研究対象となった住宅衛生は、大正・昭和前期の社会の動きと関連していたのである。この視点に改めて注目しておく必要があると思われる。